

白雪姫

グリム

菊池寛訳

青空文庫

むかしむかし、冬のさなかのことでした。雪が、鳥の羽のように、ヒラヒラと天からふつていましたときに、ひとりの女じよおう王さまが、こくたんのわくのはまつた窓まどのところになつて、ぬいものをしておいでになりました。女王さまは、ぬいものをしながら、雪をながめておいでになりましたが、チクリとゆびを針はりでおさしになりました。すると、雪のつもつた中に、ポタポタポタと三滴てきの血ちがおちました。まつ白い雪の中で、そのまつ赤な血ちの色が、たいへんきれいに見えたものですから、女王さまはひとりで、こんなことをお考えになりました。

「どうかして、わたしは、雪のようからだが白く、血のように赤いうつくしいほつぺたをもち、このこくたんのわくのように黒い髪かみをした子がほしいものだ。」と。

それから、すこしたちまして、女王さまは、ひとりのお姫ひめさまをおうみになりましたが、そのお姫さまは色が雪のように白く、ほおは血のように赤く、髪の毛はこくたんのよう黒くつやがありました。それで、名も白雪しろゆきひめ姫とおつけになりました。けれども、女王さまは、このお姫さまがおうまれになりますと、すぐおなくなりになりました。

一年以上たちますと、王さまはあとがわりの女王さまをおもらいになりました。その女

王さまはうつくしいかたでしたが、たいへんうぬぼれが強く、わがままなかたで、じぶんよりもほかの人がすこしでもうつくしいと、じつとしてはいられないかたでありました。ところが、この女王さまは、まえから一つのふしぎな鏡かがみを持っておいでになりました。その鏡をごらんになるときは、いつでも、こうおっしゃるのでした。

「鏡かがみや、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。」

国じゅうで、だれがいちばんうつくしいか、いつておくれ。」
すると、鏡はいつもこう答えていました。

「女王さま、あなたこそ、お国でいちばんうつくしい。」

それをきいて、女王さまはご安心なさるのでした。というのは、この鏡は、うそをいわないということを、女王さまは、よく知っていられたからです。

そのうちに、白雪姫しらゆきひめは、大きくなるにつれて、だんだんうつくしくなってきました。お姫さまが、ちようど七つになられたときには、青々と晴れた日のように、うつくしくなつて、女王さまよりも、ずつとうつくしくなりました。ある日、女王さまは、鏡の前について、おたずねになりました。

「鏡や、鏡、壁にかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」

すると、鏡は答えていいました。

「女王さま、じよおうここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、白雪姫しらゆきひめは、千ばいもうつくしい。」

女王さまは、このことをおききになると、びっくりして、ねたましくなって、顔色を黄いろくしたり、青くしたりなさいました。

さて、それからというものは、女王さまは、白雪姫をごらんになるたびごとに、ひどくいじめるようになりました。そして、ねたみと、こうまんどが、野原の草がいっぱいはびこるように、女王さまの、心の中にだんだんとはびこってきましたので、いまでは夜もひるも、もうじつとしてはいられなくなりました。

そこで、女王さまは、ひとりのかりうどをじぶんのところにおよびになって、こういいつけられました。

「あの子を、森の中につれていっておくれ。わたしは、もうあの子を、二どと見たくないんだから。だが、おまえはあの子をころして、そのしょうこに、あの子の血ちを、このハンケチにつけてこなければなりません。」

かりうどは、そのおおせにしたがつて、白雪姫しらゆきひめを森の中へつれていきました。かりうどが、狩かりにつかう刀かたなをぬいて、なにも知らない白雪姫の胸むねをつきさそうとしますと、お姫さまは泣いて、おつしやいました。

「ああ、かりうどさん、わたしを助けてちょうだい。そのかわり、わたしは森のおくの方にはいつていつて、もう家にはけつしてかえらないから。」

これをきくと、かりうども、お姫さまがあまりにうつくしかったので、かわいいそうになつてしまつて、

「じゃあ、はやくおにげなさい。かわいいそうなお子さまだ。」といいました。

「きつと、けものが、すぐでてきて、くいころしてしまうだろう。」と、心のうちで思いましたが、お姫さまをころさないですんだので、胸の上からおもい石でもとれたように、らかな気もちになりました。ちようどそのとき、イノシシの子が、むこうからとびだしてきましたので、かりうどはそれをころして、その血ちをハンケチにつけて、お姫さまをころしたしようこに、女王さまのところを持っていきました。女王さまは、それをごらんになつて、すっかり安心して、白雪姫は死んだものと思つていました。

さて、かわいいそうなお姫さまは、大きな森の中で、たったひとりぼっちになつてしまつ

て、こわくつてたまらず、いろいろな木の葉っぱを見ても、どうしてよいのか、わからないくらいでした。お姫さまは、とにかくかけだして、とがった石の上をとびこえたり、イバラの中をつきぬけたりして、森のおくの方へとすすんでいきました。ところが、けだものはそばをかけすぎますけれども、すこしもお姫さまをきずつけようとはしませんでした。白雪姫は、足のつづくかぎり走りつづけて、とうとうゆうがたになるころに、一軒けんの小さな家を見つきましたので、つかれを休めようと思つて、その中にはいりました。その家の中にあるものは、なんでもみんな小さいものばかりでしたが、なんともいいようがないくらいりっぱで、きよらかでした。

そのへやのまん中には、ひとつの白い布きれをかけたテーブルがあつて、その上には、七つの小さなお皿さつらがあつて、またその一つ一つには、さじに、ナイフに、フォークがつけてあつて、なおそのほかに、七つの小さなおさかずきがおいてありました。そして、また壁かべぎわのところには、七つの小さな寝ねどこが、すこしあいだをおいて、じゅんじゅんにならんで、その上には、みんな雪のように白い麻あさの敷布しきふがしいてありました。

白雪姫は、たいへんおながすいて、おまけにのどもかわいていましたから、一つ一つのお皿さつらから、すこしずつやさいのスープとパンをたべ、それから、一つ一つのおさかずき

から、一滴てきずつブドウ酒しゆをのみました。それは、一つところのを、みんなたべてしまうのは、わるいと思つたからでした。それが、すんでしまうと、こんどは、たいへんつかれていましたから、ねようと思つて、一つの寝どこにはいつてみました。けれども、どれもこれもちようどうまくからだにあいませんでした。長すぎたり、短すぎたりしましたが、いちばんおしまいに、七ばんめの寝どこが、やつとからだにあいました。それで、その寝どこにはいつて、神さまにおいのりをして、そのままグツスリねむってしまった。

日がくれて、あたりがまつくらになつたときに、この小さな家の主人たちがかえつてきました。その主人たちというのは、七人の小人こびとでありました。この小人たちは、毎日、山の中にはいりこんで、金や銀ぎんのはいつた石をさがして、よりわけたり、ほりだしたりするのが、しごとでありました。小人こびとはじぶんたちの七つのランプに火をつけました。すると、家の中がパツとあかるくなりますと、だれかが、その中にいるということがわかりました。それは、小人たちが家をでかけたときのように、いろいろのものが、ちゃんとおいてなかつたからでした。第一の小人が、まず口をひらいて、いいました。

「だれか、わしのいすに腰こしをかけた者があるぞ。」
すると、第二の小人がいました。

「だれか、わしのお皿さじらのものをすこしたべた者があるぞ。」

第三の小人がいました。

「だれか、わしのパンをちぎった者があるぞ。」

第四の小人がいました。

「だれか、わしのやさいをたべた者があるぞ。」

第五の小人がいました。

「だれかわしのフォークを使った者があるぞ。」

第六の小人こびとがいました。

「だれか、わしのナイフで切った者があるぞ。」

第七の小人がいました。

「だれか、わしのさかすきでのんだ者があるぞ。」

それから、第一の小人が、ほうぼうを見まわしますと、じぶんの寝ねどこが、くぼんでいるのを見つけて、声をたてました。

「だれが、わしの寝どこにはいりこんだのだ。」

すると、ほかの小人こびとたちが寝ねどこへかけつけてきて、さわぎだしました。

「わしの寝どこにも、だれかがねたぞ。」

けれども、第七ばんめの小人は、じぶんの寝どこへいつてみると、その中に、はいつてねむっている白雪姫を見つけました。こんどは、第七ばんめの小人が、みんなをよびますと、みんなは、なにおこったのかと思つてかけよつてきて、びつくりして声をたてながら七つのランプを持ってきて白雪姫をてらしました。

「おやおやおやおや、なんて、この子は、きれいなんだろう。」と、小人はさげびました。それから小人たちは、大よろこびで、白雪姫をおこさないで、寝どこの中に、そのままソツとねさせておきました。そして、七ばんめの小人は、一時間ずつほかの小人の寝どこにねるようにして、その夜をあかしました。

朝になつて、白雪姫は目をさまして、七人の小人を見て、おどろきました。けれども、小人たちは、たいへんしんせつにしてくれて、「おまえさんの名まえはなんといふのかな。」とたずねました。すると、

「わたしの名まえは、白雪姫というのです。」と、お姫さまは答えました。

「おまえさんは、どうして、わたしたちの家にはいつてきたのかね。」と、小人たちはききました。そこで、お姫さまは、まま母が、じぶんをころそうとしたのを、かりうどが、

そつと助けてくれたので、一日じゆう、かけずりまわつて、やつと、この家を見つけたことを、小人たちに話しました。その話をきいて、小人たちは、

「もしも、おまえさんが、わたしたちの家の中のしごとをちやんと引きうけて、にたきもすれば、おとこものべるし、せんたくも、ぬいものも、あみものも、きちんときれいにする気があれば、わたしたちは、おまえさんを家うちにおいてあげて、なんにもふそくのないうようにしてあげるんだが。」といいました。

「どうぞ、おねがいます。」と、お姫さまはたのみました。それからは、白雪姫しらゆきひめは、小人こびとの家にいることになりました。

白雪姫は、小人の家のしごとを、きちんとやります。小人の方では毎朝、山にはいりこんで、金や銀ぎんのはいった石をさがし、夜になると、家にかえってくるのでした。そのときまでに、ごはんのしたくをしておかねばなりません。ですから、ひるまは白雪姫は、たったひとりですすをしなければなりませんので、しんせつな小人たちは、こんなことをいいました。

「おまえさんのまま母さんに用心なさいよ。おまえさんが、ここにいることを、すぐ知るにちがいない。だから、だれも、この家の中にいれてはいけないよ。」

こんなことはすこしも知らない女王さまは、かりうどが白雪姫をころしてしまつたものだと思つて、じぶんが、また第一のうつくしい女になつたと安心していましたので、あるとき鏡の前かがみにいつて、いいました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかつている鏡よ。

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いつておくれ。」

すると、鏡が答えました。

「女王さまじよおう、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家にいる白雪姫しらゆきひめは、

まだ千ばいもうつくしい。」

これをきいたときの、女王さまのおどろきようといつたらありませんでした。この鏡は、けつしてまちがつたことをいわない、ということを知つていましたので、かりうどが、じぶんをだましたということも、白雪姫が、まだ生きているということも、みんなわかつてしまいました。そこで、どうにかして、白雪姫をころしてしまいたいものだと思ひまして、またあたらしく、いろいろと考えはじめました。女王さまは、国じゆうでじぶんがいちば

んうつくしい女にならないうちは、ねたましくて、どうしても、安心してられないからでありました。

そこで、女王さまは、おしまいになにか一つの計略けいりやくを考えだしました。そしてじぶんの顔を黒くぬって、年よりの小間物屋こまものやのような着物きものをきて、だれにも女王さまとは思えないようになってしまいました。こんなふうをして、七つの山をこえて、七人の小人こびとの家にいつて、戸をトントンとたたいて、いいました。

「よい品物しなものがありますが、お買いになりませんか。」

白雪姫はなにかと思つて、窓まどから首をだしてよびました。

「ごんには、おかみさん、なにがあるの。」

「上等じょうとうな品で、きれいな品を持つてきました。いろいろかわつたしめひもがあります

。」といつて、いろいろな色の絹糸きぬいとであんだひもを、一つ取りだしました。白雪姫は、

「この正直しょうじき そうなおかみさんなら、家の中にいれてもかまわないだろう。」と思ひまして、戸をあけて、きれいなしめひもを買いとりました。

「おじょうさんには、よくにあうことでしょう。さあ、わたしがひとつよくむすんであげましょう。」と、年よりの小間物屋こまものやはいいました。

白雪姫は、すこしもうたがう気がありませんから、そのおかみさんの前に立って、あたらしい買ったてのひもでもすばせました。すると、そのばあさんは、すばやく、そのしめひもを白雪姫の首をまきつけて、強くしめましたので、息ができなくなって、死んだようにたおれてしまいました。

「さあ、これで、わたしが、いちばんうつくしい女になったのだ。」といって、まま母はいそいで、でていってしまいました。

それからまもなく、日がくれて、七人の小人こびとたちが、家にかえってきましたが、かわいがっていた白雪姫が、地べたの上にたおれているのを見たときには、小人たちのおどろきようといったらありませんでした。白雪姫は、まるで死人のように、息もしなければ、動きもしませんでした。みんなで白雪姫を地べたから高いところにつれていきました。そして、のどのところが、かたくしめつけられているのを見て、小人たちは、しめひもを二つに切ってしまいました。すると、すこし息をしはじめて、だんだん元気づいてきました。小人たちは、どんなことがあったのかをききますと、姫はきようあった、いつさいのことを話しました。

「その小間物こまもの売りの女こそ、鬼おにのような女王にちがいない。よく気をつけなさいよ。わた

したちがそばにいないときには、どんな人だって、家にいれないようにするんですよ。」

わるい女王の方では、家にかえつてくると、すぐ鏡の前かがみにいつて、たずねました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いつておくれ。」

すると、鏡は、正直しょうじきにまえとおなじに答えました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。」

けれども、いくつも山こした、

七人の小人こびとの家にいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

と、このことを女王さまがきいたときには、からだじゆうの血ちがいつぱんに、胸むねによってきたかと思うくらいおどろいてしまいました。白雪姫が、また生きかえったということを知ったからです。

「だが、こんどこそは、おまえを、ほんとうにころしてしまうようなことを工夫くふうしてやるぞ。」そういつて、じぶんの知っている魔法まほうをつかつて、一つの毒どくをぬった櫛くしをこしらえ

ました。それから、女王さまは、みなりをかえ、まえとはべつなおばあさんのすがたになって、七つの山をこえ、七人の小人のところについて、トントンと戸をたたいて、いいました。

「よい品物しなものがありますが、お買いになりませんか。」

白雪姫は、中からちよつと顔をだして、

「さあ、あつちについてちようだい。だれも、ここにいけないことになっているんですから。」

「でも、見るだけなら、かまわないでしょう。」

おばあさんはそういって、毒どくのついている櫛くしを、箱はこから取りだし、手のひらにのせて高くさしあげてみせました。ところが、その櫛くしがばかに、白雪姫のお気にいりましたので、その方に気をとられて、思わず戸をあけてしまいました。そして、櫛くしを買うことがきまつたときに、おばあさんは、

「では、わたしが、ひとつ、いいぐあいに髪かみをといてあげましょう。」といいました。

かわいそうな白雪姫は、なんの気なしに、おばあさんのいうとおりになせました。ところが、櫛くしの齒はが髪かみの毛けのあいだにはいるかはいらないうちに、おそろしい毒どくが、姫あたまの頭あたまに

しみこんだものですから、姫はそのぼで気をうしなつてたおれてしまいました。

「いくら、おまえがきれいでも、こんどこそおしまいだろう。」と、心のまがった女は、きみのわるい笑いを浮かべながら、そこをでていつてしまいました。

けれども、ちようどいいぐあいに、すぐゆうがたになつて、七人の小人こびとがかえつてきました。そして、白雪姫が、また死んだようになって、地べたにたおれているのを見て、すぐま母のしわざと気づきました。それで、ほうぼう姫のからだをしらべてみますと、毒どくの櫛くしが見つかりましたので、それをひきぬきますと、すぐに姫は息をふきかえました。そして、きようのことを、すっかり小人たちに話しました。小人たちは、白雪姫にむかつてもういちど、よく用心して、けつしてだれがきても、戸をあけてはいけないと、ちゆういしました。

心のねじけた女王さまは、家にかえつて、鏡かがみの前に立つていいました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかつている鏡よ。

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いつておくれ。」

すると、鏡は、まえとおなじようにに答えました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。」

けれども、いくつも山こした、

七人の小人の家にいる白雪姫は、

まだ千ばいもうつくしい。」

女王さまは、鏡かがみが、こういったのをきいたとき、あまりの腹はらだちに、からだじゆうをブルブルとふるわしてくやしがりしました。

「白雪姫のやつ、どうしたつて、ころさないではおくものか。たとえ、わたしの命がなくたって、そうしてやるのだ。」と、大きな声でいいました。それからすぐ、女王さまは、まだだれもはいつたことのない、はなれたひみつのへやにいつて、そこで、毒どくの上に毒をぬった一つのリンゴをこさえました。そのリンゴは、見かけはいかにもうつくしくて、白いところに赤みをもつていて、一目見ると、だれでもかじりつきたくなるようにしてありました。けれども、その一きれでもたべようものなら、それこそ、たちどころに死んでしまふという、おそろしいリンゴでした。

さて、リンゴが、すっかりできあがりますと、顔を黒くぬつて、百姓しやうのおかみさんのふうをして、七つの山をこして、七人の小人こびとの家へいきました。そして、戸をトントンたたきますと、白雪姫が、窓まどから頭あたまをだして、

「七人の小人が、いけないといいましたから、わたしは、だれも中にいれるわけにはいきません。」といいました。

「いいえ、はいらなくてもいいんですよ。わたしはね、いまリングをすててしまおうかと思っているところなので、おまえさんにも、ひとつあげようかと思ってね。」と、百姓しやうの女はいいました。

「いいえ、わたしはどんなものでも、人からもらつてはいけないのよ。」と、白雪姫はこたわりました。

「おまえさんは、毒どくでもはいつていると思いなさるのかね。まあ、ごらんなさい。このとおり、二つに切つて、半分はわたしがたべましょう。よくうれた赤い方を、おまえさんおあがりなさい。」といいました。

そのリングは、たいへんじょうずに、こしらえてありまして、赤い方がわだけに、毒どくがはいっていました。白雪姫は、百姓のおかみさんが、さもうまそうにたべているのを見ますと、そのきれいなリングがほしくてたまらなくなりました。それで、ついなんの気なしに手をだして、毒どくのはいつている方の半分を受けとってしまいました。けれども、かじり口にいれるかきれないうちに、バツタリとたおれ、そのまま息がたえてしまいました。

すると、女王さまは、そのようすをおそろしい目つきでながめて、さもうれしそうに、大きな声で笑いながら、

「雪のように白く、血ちのように赤く、こくたんのように黒いやつ、こんどこそは、小人こびとたちだつて、助けることはできません。」といいました。そして、大いそぎで家にかえりまず、まず鏡かがみのところにかけてたずねました。

「鏡かがみや、鏡かがみ、壁かべにかかっている鏡よ。」

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いっておくれ。」
すると、とうとう鏡が答えました。

「女王さま、お国でいちばん、あなたがうつくしい。」

これで、女王さまの、ねたみぶかい心も、やっとしずめることができ、ほんとうにおちついた気もちになりました。

ゆうがたになつて、小人たちは、家にかえつてきましたが、さあたいへん、こんども、また白雪姫が、地べたにころがつて、たおれているではありませんか。びっくりして、かけよつてみれば、もう姫の口からは息一つすらしていません。かわいそうに死んで、もうひえきつてしまっているのです。小人たちは、お姫さまを、高いところにはこんでい

て、なにか毒どくになるものはありはしないかと、さがしてみたり、ひもをといたり、髪かみの毛をすいたり、水や、お酒で、よくあらってみたりしましたが、なんの役にもたちませんでした。みんなでかわいがっていたこどもは、こうしてほんとうに死んでしまつて、ふたたび生きかえりませんでした。

小人たちは、白雪姫のからだを、一つの棺かんの上にのせました。そして、七人の者が、のこらずそのまわりにすわつて、三日三晩泣きくらししました。それから、姫をうずめようと思いましたが、なにしろ姫はまだ生きていたそのまま、いきいきと顔色も赤く、かわいらしく、きれいなものですから、小人たちは、

「まあ見ろよ。これを、あのまつ黒い土の中に、うめることなんかできるものか。」そういつて、外から中が見られるガラスの棺かんをつくり、その中に姫のからだをねかせ、その上に金文字きんもじで白雪姫という名を書き、王さまのお姫さまであるということも、書きそえておきました。それから、みんな、棺を山の上にはこびあげ、七人のうちのひとり、いつでも、そのそばにいて番をすることになりました。すると、鳥や、けだものまで、そこに来て、白雪姫のことを泣きかなしむのでした。いちばんはじめにきたのは、フクロウで、そのつぎがカラス、いちばんおしまいにはハトがきました。

さて、白雪姫は、ながいながいあいだ棺かんの中によこになつていました。そのからだは、すこしもかわらず、まるで眠っているようにしか見えませんでした。お姫さまは、まだ雪のように白く、血ちのように赤く、こくたんのように黒い髪かみの毛をしていました。

すると、そのうち、ある日のこと、ひとりの王子おうじが、森の中にまよいこんで、七人の小人の家にきて、一晩とまりました。王子は、ふと山の上にきて、ガラスの棺に目をとめました。近よつてのぞきますと、じつにうつくしいうつくしい少女のからだがはいつています。しばらくわれをわすれて見とれていました王子は、棺の上に金文字で書いてあることばをよみ、すぐ小人たちに、

「この棺かんを、わたしにゆづつてくれませんか。そのかわりわたしは、なんでも、おまえさんたちのほしいと思うものをやるから。」といわれました。けれども、小人たちは、

「たとえわたしたちは、世界じゅうのお金を、みんないただいても、こればかりはさしあげられません。」とお答えしました。

「そうだ、これにかわるお礼なんぞあるもんじやあない。だがわたしは、白雪姫を見ないでは、もう生きていられない。お礼なぞしないから、ただください。わたしの生きているあいだは、白雪姫をうやまい、きつとそまつにはしないから。」王子おうじはおりいっておたの

みになりました。

王子が、こんなにまでおっしゃるので、氣だてのよい小人たちは、王子の心もちを、氣のどくに思つて、その棺をさしあげることになりました。王子は、それを、家来^{けらい}たちにめいじて、肩^{かた}にかついではこばせました。ところが、まもなく、家来のひとり^{ひと}が、一本の木につまづきました。で、棺がゆれたひょうしに、白雪姫がかみ切つた毒^{どく}のリンゴの一きれが、のどからとびだしたものです。すると、まもなく、お姫さまは目をパツチリ見ひらいて、棺^{かん}のふたをもちあげて、起きあがってきました。そして元氣づいて、

「おやまあ、わたしは、どこにいるんでしょう。」といいました。それをきいた王子のよろこびはたとえようもありませんでした。

「わたしのそばにいますよ。」といつて、いままであつたことをお話しになつて、そのあとから、

「わたしは、あなたが世界じゅうのなにものよりもかわいいのです。さあ、わたしのおとうさんのお城^{しろ}へいっしょにいきましょう。そしてあなたは、わたしのお嫁^{よめ}さんになつてください。」といわれました。

そこで、白雪姫もしようちして、王子といっしょにお城にいきました。そして、ふたり

のごこんれいは、できるだけけりつぱに、さかんにいわれることになりました。

けれども、このおいわいの式しきには、白雪姫のまま母である女王さまもまねかれることになりました。女王さまは、わかい花嫁はなよめが白雪姫だとは知りませんでした。女王さまはうつくしい着物きものをきてしまったときに、鏡かがみの前まへにいつて、たずねました。

「鏡や、鏡、壁かべにかかっている鏡よ。

国じゆうで、だれがいちばんうつくしいか、いつておくれ。」

鏡は答えていいました。

「女王さま、ここでは、あなたがいちばんうつくしい。

けれども、わかい女王さまは、千ばいもうつくしい。」

これをきいたわるい女王さまは、腹をたてまいことか、のろいのことばをつぎつぎにあげせかけました。そして、気になって気になって、どうしてよいか、わからないくらいでした。女王さまは、はじめのうちには、もうごこんれいの式しきにはいくのをやめようかと思いましたが、それでも、それでも、じぶんでかけていつて、そのわかい女王さまを見ないのでは、安んできまませんでした。女王さまは、まねかれたご殿てんにはいりました。そして、ふと見れば、わかい女王になる人とは白雪姫ではありませんか。女王はおそろしきで、そ

ここに立ちすくんだまま動くことができなくなりました。

けれども、そのときは、もう人々がまえから石炭せきたんの火の上に、鉄てつでつくったうわぐつをのせておきましたのが、まっ赤にやけてきましたので、それを火ばしでへやの中に持ってきて、わるい女王さまの前におきました。そして、むりやり女王さまに、そのまっ赤にやけたくつをはかせて、たおれて死ぬまでおどらせました。

青空文庫情報

底本：「グリム 世界名作 白雪姫」 光文社

1949（昭和24）年3月5日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年2月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白雪姫

グリム

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 菊池寛訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>